薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０２１年
２月２６日
第１１１号

オウレン（キンポウゲ科）

この「かわら版」の第１回目で紹介したのがセリバオウレンでした。が、非常に重要な薬用植物なのに、簡単な紹介でしたので、再度、紹介します。園の南奥の寒冷紗の中に、今、花が見られます。日本特産の常緑多年草で、落葉樹林の下で生育します。雌雄同種株、雄株、雌株の３タイプが見られます、地域によって葉形に変異があり、キクバオウレン、セリバオウレン、コセリバオウレン、ミドリオウレンと呼ばれる変種が知られていますが、現在ではオウレン１種にまとめられています。本学のオウレンの花も変異が入っていて、典型的なオウレンとは形状がやや異なります。名前の由来は、黄色の根茎が毎年ひと節ずつ伸びて連なることから。根茎を乾燥したものが、生薬の黄連（オウレン）となり、苦味成分のベルベリンを含みます。苦味健胃薬、清熱薬として、半夏瀉心湯や黄連解毒湯などの漢方薬に配合されます。なお、山林下の栽培では、収穫に10～20年を要します。

オモト（キジカクシ科）

まだ、花の姿が見られない第三圃場では、厚くつやのある濃緑色の葉が目に止まります。関東以西に生える常緑多年草で、年中、青々とエネルギッシュな様子から、植物の漢名を「万年青」といいます。江戸時代に大変流行した園芸植物で、葉が変化したものや斑入りのもは高値で取引きされていたそうです。日本では白癬などに対する外用薬の民間薬として、葉を煎じたものが使用されていました。中医学では、根および根茎を乾燥したものが、植物の漢名と同じ「万年青」という中薬となり、清熱解毒薬として分類されますが、悪心、嘔吐、四肢の麻痺、けいれんなどを起こしやすいので、内服薬としてはほとんど使用されません。実際、強心配糖体であるロデキシンAやロデインを含み、基本的に毒草扱いですので、素人は絶対に取り扱わないように！